

若者のカラオケ利用と選曲の 心理に関する調査

—ポピュラー音楽受容の一形態として—

中西 裕 (表現文化学科)
玉木 博章 (愛知県立総合看護専門学校)

1. はじめに

筆者らは前稿(中西・玉木2015-1)において、大学生への聞き取り調査をもとに、カラオケの場において自分の歌唱する楽曲をどのような心理と気遣いの中で選択しているかについて分析し、連歌を引き合いに出しながら「一座する芸能」としての文化的な活動の側面を指摘した。彼らはカラオケの場面において、「自分の好きな曲を気持ちよく歌いたい」という自己目的的な欲求と「参加者で良好な雰囲気を作りたい」という関係性志向的な欲求を調和させようと努力しており、特に参加者の中に気を遣う必要のある者がいる場合には、選曲においても様々な配慮を行っていることが明らかになった。前稿では、その具体的気遣いとして「参加者が知っている曲を選択する」、「熱狂的ファンがいる楽曲を避ける」、「他の参加者の選曲の流れを配慮する」、「序盤でバラードを歌わない」、「必要に応じて『ネタ曲』^{註1}を投入する」、といった内容を指摘した。そして彼らにとってのカラオケとは、参加者相互の気遣いを通して関係構築のためのコミュニケーション的活動を実現すると共に、音楽を参加的に楽しむ芸術的活動をも調和的に実現していこうとする行為であると結論づけた。

しかしながら前稿でも述べたように、あくまでそれは少数者からの聞取りによる分析から得られた知見であり、若者のカラオケにおける気遣いのあり方に関する局所的な事情を記述したものであった。

そこで本稿では、その分析に定量的な裏づけを行おうと思う。本稿は聞取り調査から得られた気遣いの要素をもとに質問紙を作成し、大学生に対してアンケート調査を実施し、その結果を集計・分析することで前稿の考察に一定の普遍性が見られるかどうかを検討しようとするものである。

2. 調査の方法

2-1 質問紙

聞取り調査をもとに作成した質問紙の内容は次のとおりである。大学生のカラオケ利用の様態の概要を掴むためにカラオケに行く頻度や一回の所要時間なども質問している。なお、以下の質問の前に所属学科、学年、性別、社会人学生か否かの別を尋ね、さらに本アンケートにおける「カラオケ」が「いわゆる個室型のカラオケ店を利用したもの」を指すことをことわっている。なお、以下では回答欄などはすべて省略してある。

問1 あなたは、過去1年間に何回くらいカラオケを利用しましたか？

一つ選んで番号を○で囲んでください。

- ①全く利用しなかった ②1～4回 ③5～11回程度（月1回未満）
④12～23回程度（月1回以上） ⑤24回～47回（月2～3回）
⑥48回以上（週1回以上）

問2 問1で①と答えた方だけにおたずねします（それ以外の方は問3に進んでください）。カラオケをしなない理由としてあてはまるものを全て選んで番号を○で囲んでください。

- ①歌うのが嫌い（下手）だから ②一緒に行く相手がいないから
③友達と歌の好みが合わないから ④最近の流行の歌を良く知ら

ないから ⑤気をつかって疲れるから ⑥その他の理由

(問1で①を選んだ方への質問はここまでです。ご協力ありがとうございました。)

問3 あなたが行くカラオケは平均して一回何時間くらいですか。一つ選んで番号を○で囲んでください。

①1時間未満 ②だいたい1～2時間 ③だいたい2～4時間

④だいたい4～6時間 ⑤だいたい6～8時間 ⑥8時間以上

問4 あなたは次のようなカラオケに行ったことがありますか？ 次のうち、経験したことのあるものを全て選んで番号を○で囲んでください。

①一人で行くカラオケ②家族とのカラオケ

③全く遠慮のいらなきわめて親しい友達だけと行くカラオケ

④友達どうしだが少し気を遣う必要のある友達もいるカラオケ

⑤学生どうしだがサークルの先輩後輩などの上下関係のある人たちとのカラオケ

⑥同世代の人ばかりだが、新しいクラスの仲間との親睦や行事の打ち上げなど、必ずしも親しくない人もいるようなカラオケ

⑦アルバイト先の上司や先生など、目上で世代の違う人もいるカラオケ

⑧それ以外のパターンがあれば、具体的に記入してください。

問5 問4で①「一人で行くカラオケ」を選択した人にだけうかがいます(それ以外の方は問6に進んでください)。あなたが一人でカラオケに行くときの気持ちに合致するものを全て選び番号を○で囲んでください。

①好きな歌を誰にも遠慮なく歌いたい ②同じ歌を何度も歌いたい ③ストレスを発散したい ④みんなと行くときのために歌の練習をしたい ⑤気をつかいたくない ⑥ヒマつぶしをしたい

問6 遠慮のいない相手ばかりのカラオケで自分が歌う曲を選ぶ(予約を入れる)とき、あなたはどのようなことをどの程度考慮していますか？

後の1から7の各文について、それぞれ次の4段階から一つ選び、番号を各文の後の〔 〕に記入してください。

- ①そのとおりだ ②どちらかといえばそうだ ③どちらかといえば違う ④まったくそうでない

- 1.できるだけ、みんなが知っていそうな曲を歌うようにしている。
- 2.参加メンバーが好きそうなジャンルを考えて選曲をしている。
- 3.序盤ではみんなで一緒に盛り上がるような曲を入れるようにしている。
- 4.序盤ではバラードを歌わないようにしている。
- 5.みんなが今歌っている（予約している）曲目を考慮して選曲をしている。
- 6.歌われた履歴のランキングを参考にして選曲している。
- 7.空気が停滞してきたらいわゆる「ネタ曲」（笑いが起こるなど盛り上がる曲）を入れるようにしている

問7 気を遣う必要のある相手がいるカラオケで自分が歌う曲を選ぶ（予約を入れる）とき、あなたはどのようなことをどの程度考慮していますか？ 後の1から7の各文について、それぞれ次の4段階から一つ選び、番号を各文の後の〔 〕に記入してください。

〔以下問6と同一〕

問8 カラオケでの選曲について問6・7の1～7以外にしている配慮や気遣いがあったら書いてください。

問9 次の各文があなたの気持ちにどれくらい合致しているか、それぞれ次の4段階から一つずつ選び、番号を各文の後の〔 〕に記入してください。

- ①そのとおりだ ②どちらかといえばそうだ ③どちらかといえば違う ④まったくそうでない

〔各文は3-8に記載〕

2-2 調査の概要

調査時期：2015年7月

調査対象：筆者（中西）が担当する就実大学の総合教養教育科目の授業「情報と社会」「ポピュラー音楽の歴史」ならびに資格課程科目の授業「図書館情報技術論」の受講者に回答を依頼し計176名（女性119名、男性55名、性別未記入2名）から回答を得た。学部は人文科学部・教育学部を中心として薬学部・経営学部を若干名含んでいる。学年は1～4年まで混在している。なお、社会人学生が3名含まれていたが、一般的な大学生世代でない者が含まれるため今回の量的集計からは除外することとした。

回答方法：無記名、手書きで回答

備 考：問1でカラオケを過去1年間利用しなかった者（①を選択した者）を「カラオケに行く習慣のない層」と考えて問3以降の質問への回答を求めなかったが、実際には問1で①を選んだ回答者のほとんどが問3以降にも回答していた。過去1年間にカラオケ利用がなくても自らを「カラオケ利用者」と認識していることが読み取れるので、今回の集計にはそれらの回答も除外せずに含めることとした。

3. 集計結果と分析

ここからは、得られたデータに関して、問1から順次項目ごとに分析をおこなっていききたい。

3-1 問1 過去1年間におけるカラオケ利用の回数（択一・選択率）

カラオケ利用回数	全体	女性	男性
0	9.8%	8.6%	12.7%
1～4	38.7%	39.7%	34.5%
5～11	32.4%	31.9%	34.5%
12～23	9.8%	9.5%	10.9%
24～47	9.2%	10.3%	7.3%
48～	0.0%	0.0%	0.0%

性差は小さいが、全体に女子の頻度が若干高いことがわかる。多くの者が年間1～4回、5～11回を選択しており、さらなる選択肢の細分化が必要であったかもしれない。平均のカラオケ利用回数は明確に導くことは困難であるが、選択肢範囲の中央値を使った推定平均では年8.56回（月平均0.71回）となった。これに関連して、実際に『カラオケ白書2015』（全国カラオケ事業者協会2015）では、一般（15～69歳341名）の月平均カラオケボックス利用回数は0.48回（年間5.8回）、10代が0.71回（年間8.52回）、20代が1.09回（年間13.1回）、「学生・フリーター」に限れば0.57回（年間6.84回）と記載されている。これらと本調査とを比較すれば、今回の調査対象はカラオケボックス利用頻度に関して、一般の同世代学生と大きく誤差の生じる数字でないことがわかる。このことは本調査が、単に特定地域、特定大学の学生のカラオケ利用の様態を示しているばかりではなく、さらなる一般性を含意したデータであり得る可能性を示唆している。

3-2 問2 カラオケに行かない理由（複数選択・選択数）

カラオケに行かない理由	全体	女性	男性
歌うのが嫌い（下手）だから	9	4	5
一緒に行く相手がいないから	4	1	3
友達と歌の好み合わないから	3	0	3
最近の流行の歌を良く知らないから	6	3	3
気をつかって疲れるから	5	2	3
その他の理由	8	6	2

問1でカラオケに過去1年間1度も行ってないという回答者(17名)に行かない理由を複数回答で尋ねたが、実際の回答者数は20名であった。このことからカラオケが実は好きではないが付き合い上行っているというケースの存在が想定できる。加えて「その他」を半数近くが選択していることから考えて、残念ながらこの選択肢の設定が適切とは言い難いことがわかる。前稿の聞き取りはカラオケ好きの人たちを対象にしていたため、この結果からカラオケ嫌いの人たちの心理に関する検討が不十分であったことがわかる。このようなカラオケ嫌いの人に関する検討は今後の課題のひとつである。

3-3 問3 1回のカラオケの所要時間(択一・選択率)

カラオケ所要時間	全体	女性	男性
1時間未満	0.6%	0.0%	2.0%
だいたい1~2時間	8.0%	6.4%	9.8%
だいたい2~4時間	40.1%	38.5%	45.1%
だいたい4~6時間	36.4%	39.4%	29.4%
だいたい6~8時間	12.3%	12.8%	11.8%
8時間以上	2.5%	2.8%	2.0%

回答者実数は女性109名、男性51名、不明2名、計162名である。男女について度数分布の差異の χ^2 検定を行ったところ $p=.000$ で有意差が認められ、女性の利用時間は男性よりやや長い傾向があると言える。ほとんどのカラオケ利用者が2~6時間のカラオケを行っており、選択肢範囲の中央値を使った推定平均時間は4.3時間である。

3-4 問4 一緒にカラオケに行くメンバー(複数選択・選択率)

ここでは、どのようなメンバーによるカラオケを経験したことがあるかを複数選択で答えさせている。

カラオケのメンバー	全体	女性	男性
一人で	31.3%	33.9%	24.5%
家族と	54.4%	55.0%	53.1%
全く遠慮のいないきわめて親しい友達だけ	95.6%	94.5%	98.0%
友達どうしだが少し気を遣う必要のある友達もいる	63.1%	68.8%	51.0%
学生どうしだが上下関係のある人たちと	35.0%	35.8%	34.7%
同世代の人ばかりだが必ずしも親しくない人もいる	31.3%	26.6%	42.9%
目上で世代の違う人もいる	15.6%	14.7%	18.4%
それ以外	2.5%	2.8%	2.0%

実回答者数は女性109名、男性49名、不明2名で計160名である。ほとんどの者が「気の置けない仲間とのカラオケ」を経験している。「少し気を遣う友達がいるカラオケ」は女性の2/3、男性の1/2が経験している。家族とのカラオケは男女とも約半数の者が経験している。「サークルなど上下関係ありのカラオケ」は男女とも1/3強が、一人で行くカラオケ（いわゆる「ひとカラ」）は女性の1/3、男性の1/4が経験している。「同世代だが必ずしも親しくないメンバーのいるカラオケ」は男性の方が経験率は高い。

これらの結果は、男女間でのカラオケという時間空間の共有方法に関する位置づけの違いを示唆している可能性がある。たとえば、「同世代の人ばかりだが必ずしも親しくない人もいるカラオケ」への参加経験だが、男性の約43%に対して女性は約26%と大きな開きがある。このことから、女性におけるカラオケ参加へのハードルの高さや、あるいは男性における「付き合い」の重視といった傾向が指摘できるかもしれない。いっぽうで「友達どうしだが少し気を遣う必要のある友達もいるカラオケ」への参加経験は男性の51%に対して女性は約69%と非常に高い。この結果は、翻って見れば「友達であっても女性は気を遣っている」と解釈することも可能だろう。こういった男女差については詳細な聞き取りを行っていないのでまだ断定できる段階ではないが、今後の課題の一つにはなり

そうである。

3-5 問5 カラオケに一人で行く理由（複数選択・選択率）

「ひとカラ」の理由	全体	女性	男性
好きな歌を誰にも遠慮なく歌いたい	82.4%	78.9%	91.7%
同じ歌を何度も歌いたい	37.3%	36.8%	33.3%
ストレスを発散したい	76.5%	78.9%	66.7%
みんなと行くときのために歌の練習をしたい	56.9%	52.6%	75.0%
気をつかいたくない	52.9%	47.4%	66.7%
ヒマつぶしをしたい	35.3%	36.8%	25.0%

実回答数は女性38名、男性12名、不明1名、計51名であった。いわゆる「ひとカラ」をする理由は「好きな曲を誰にも遠慮なく歌いたい」が男女とも1位である。つまりこのことは複数で行くカラオケが、たとえ気の置けない仲間だけのカラオケであってもなんらかの「遠慮」があることを示している。全体では「ストレス発散」が2位の理由だが、女性は同率1位、男性は同率3位である。前稿（中西・玉木2015-2）の聞き取りで「気の張る友達と行くカラオケでたまったストレスをひとカラで発散する」という趣旨の発言があったが、それを裏付ける結果と見ることもできるかもしれない。仮にこのストレスが、カラオケにおけるストレスではないとしても、少なくとも複数で行くカラオケでは十分にストレスが発散できない部分があることを示している。

男性のサンプル数が少ないので断定的なことは言えないが、男性で「歌の練習」が2位に入っていることには、興味を引かれる。男性にとって複数で行くカラオケで歌うということが女性に比べて他者の視線をより意識する行為であることを示していると言えないだろうか。複数のカラオケでは歌が上手い自分を披露したいという自己顕示的な欲求を見ることができのかもしれない。

なお、ここで挙げた理由以外に、一人でカラオケにいることをSNS上で話題にして、その場で友人と交流したり、その様子を撮影し、動画共

有サイトにアップしたりするという、「ひとカラ」から始まる新たな関係構築に関する指摘もあり（辻2013）、「ひとカラ」に関しては今後さらなる調査と考察が必要と思われる。

3-6 問6・7 選曲の気遣いとメンバーによる差異（回答平均値）

続いて、前稿の聞き取り調査で抽出された選曲における気遣いを示す7個のセンテンスのそれぞれについて、「①そのとおりだ」「②どちらかといえばそうだ」「③どちらかといえば違う」「④まったくそうでない」の4段階で回答させる質問に関する分析を行う。問6では「遠慮のいらぬ相手ばかりのカラオケ」、問7では「気を遣う必要のある相手がいるカラオケ」の場において、それぞれの気遣いを示すセンテンスに対してどの程度肯定的であるかを比較した。

それぞれのセンテンスごとに未回答者がいるため回答数は若干の差があるが、集計は回答番号の数値の平均を取る方法で行った。したがって平均値が小さいほど肯定的、大きいほど否定的であり、ニュートラルは2.5となる。

センテンス	遠慮のいらぬ仲間			気を遣うメンバー		
	全体	女性	男性	全体	女性	男性
1. みんなが知っていそうな曲を歌う	2.76	2.83	2.63	1.70	1.69	1.73
2. 参加メンバーが好きそうなジャンルを考えて選曲	2.70	2.64	2.88	1.89	1.86	1.98
3. 序盤ではみんなと一緒に盛り上げられるような曲を入れる	2.32	2.32	2.32	1.91	1.92	1.92
4. 序盤ではバラードを歌わない	2.38	2.34	2.49	2.03	2.05	2.04
5. みんなが今歌っている（予約している）曲目を考慮して選曲	2.65	2.61	2.76	2.03	1.98	2.13
6. 歌われた履歴のランキングを参考にして選曲	2.73	2.61	2.94	2.36	2.27	2.54
7. 空気が停滞してきたらいわゆる「ネタ曲」を入れる	2.69	2.77	2.49	2.67	2.68	2.67

男女差について平均値の差の検定を行ったが、全ての項目において5%水準の有意差は出なかった。そこで、問6の回答と問7の回答との間の有意差を検定するために「全体」「女性」「男性」各群の、各センテンスにおける選択回答の平均値の差の検定（両側検定、対になるデータ）を行った。

結果は以下のとおりである。

センテンス	各群の間6と7との t 検定 p 値			5%水準での有意差		
	全体	女性	男性	全体	女性	男性
1.みんなが知っていそうな曲を歌う	0.000	0.000	0.000	○	○	○
2.参加メンバーが好きそうなジャンルを考えて選曲	0.000	0.000	0.000	○	○	○
3.序盤ではみんなで一緒に盛り上げられるような曲を入れる	0.000	0.000	0.006	○	○	○
4.序盤ではバラードを歌わない	0.000	0.003	0.008	○	○	○
5.みんなが今歌っている（予約している）曲目を考慮して選曲	0.000	0.000	0.000	○	○	○
6.歌われた履歴のランキングを参考にして選曲	0.000	0.000	0.000	○	○	○
7.空気が停滞してきたらいわゆる「ネタ曲」を入れる	0.874	0.563	0.211	×	×	×

「ネタ曲」に関するセンテンス以外では全ての群において問6と問7の回答に5%水準での有意差が認められた。「ネタ曲」に関するもの以外の選曲の気遣いはカラオケのメンバーによって差があり、当然のことながら、気を遣う必要のあるメンバーのいるカラオケの場面において、より濃厚にこれらの選曲の配慮が行われていることがわかる。

3-7 問8 その他の選曲の気遣い（記述）

問6・7の各センテンス以外に選曲の気遣いについて記述を求めたところ

ろ、33名（女性26名、男性7名）から回答があった。

選曲の気遣いとしては「熱狂的なファンの子がいる時はその曲をさける」「他の人が歌いたいだろう曲は入れない」といった、主として他人との選曲の重複を避ける配慮が最も多く7件、「遠慮の必要な相手の場合はアニメソング、ボカロソングをいれない」「気を遣う必要がある人がいる場合は過激な歌詞の入った曲を避ける」といった特定の楽曲群を避ける配慮が4件、長い曲を避ける配慮が3件あった。少数意見ではあるが、その他に選曲の際に考慮すべき要素として上げられたものとして「相手の年齢」「流行」「その場の雰囲気」「画面が本人映像やアニメ（のものを積極的に選択）」などがあった。

他方で、選曲の気遣いではないが「歌う順番」「歌ってない人がいたら、すすめる」といった座の調和への配慮に言及するものもあった。この他に聞く側のマナーに関するものが3件あり、「タンバリンやマラカスで盛り上げる」「選曲が済んだらデンモク^{註2}を置いてテレビ画面を見るようにする」「人が歌っているときにスマホをいじらない」であった。また、その他の配慮として「トイレに行くタイミングや座る席順に配慮する」「親しくない人とのカラオケではなるべく歌わない」などが挙げられた。

3-8 問9 カラオケへの態度（回答平均値）

カラオケへの評価・態度を示す12のセンテンスのそれぞれについて、「①そのとおりだ」「②どちらかといえばそうだ」「③どちらかといえば違う」「④まったくそうでない」の4段階で回答させる質問である。12のセンテンスは次のとおりである（以下センテンス番号で表記）。

- 1.カラオケは楽しい。
- 2.カラオケは精神的に疲れる。
- 3.カラオケに誘われるのは嬉しい。
- 4.カラオケの誘いはなるべく断りたい。
- 5.カラオケはコミュニケーションの場だ。

- 6.カラオケは自己表現の場だ。
- 7.カラオケでの振舞い方からその人の人間性を知ることができる。
- 8.カラオケでは一緒に行った人たちとの一体感を感じられる瞬間が嬉しい。
- 9.カラオケで自分の好みと違う曲を聞くのも楽しい。
- 10.カラオケから人との付き合い方を学ぶことがある。
- 11.カラオケでは、いい雰囲気を持続させることを重視したい。
- 12.カラオケでは、自分の好きな曲を歌うことを重視したい。

問6・7同様、集計は回答番号の数値の平均を取る方法で行った。したがって平均値が小さいほど肯定的、大きいほど否定的であり、ニュートラルは2.5となる。すべてのセンテンスについて男女別の有意差は出なかったので下表に記載していない。問1の過去1年間にカラオケに行った回数によって、0~4回を「少頻度群」、5回以上を「多頻度群」として（これによって人数比がほぼ半々になる）、それぞれの平均を出し、両群の平均値の差を検定した。対応のない2群に対する両側検定を行い5%水準での有意差の有無を○×で記載している。

センテンス番号	全体	少頻度群	多頻度群	t検定p値	5%有意差
1	1.46	1.81	1.17	0.00	○
2	2.99	2.53	3.37	0.00	○
3	1.69	2.05	1.39	0.00	○
4	3.12	2.60	3.55	0.00	○
5	2.02	2.11	1.94	0.19	×
6	2.36	2.37	2.35	0.89	×
7	2.19	2.11	2.25	0.29	×
8	2.13	2.39	1.92	0.00	○
9	1.65	1.82	1.52	0.01	○
10	2.37	2.53	2.24	0.03	○
11	2.11	2.05	2.16	0.46	×
12	1.94	1.97	1.92	0.67	×

1、2、3、4、8、9、10でカラオケ頻度の多寡による有意差が出ている。1~4は直接カラオケへの好悪に関するセンテンスであるため当然の結果ではあるが、8~10での差異には注目すべきだろう。多頻度群では、メンバーとの一体感をカラオケの良さと評価し、自分の好みと違う曲を聞くのも楽しむことができ、カラオケから人との付き合い方を学ぶことが、いずれも少頻度群より肯定的である。このことから、カラオケを人付き合いの場として積極的に評価できる人たちがカラオケを好んでいるということが言えるだろう。

また5の「コミュニケーションの場」という認識と6の「自己表現の場」という背反する可能性のある認識については、5が肯定的、そして6もやや肯定的であり、頻度群の差異がないこと、11の「メンバーとの調和の重視」と12の「自分の歌唱欲求の重視」も、相反する欲求でありながら頻度群の差異なく肯定的に評価されている点も注目すべきだろう。

次にセンテンス相互の相関係数を算出し、マトリクスにしたものが次の表である。±0.4(中程度)以上の相関が見られる箇所を太枠で示している。

センテンス相互の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
2	-0.6										
3	0.7	-0.5									
4	-0.7	0.7	-0.7								
5	0.3	-0.2	0.3	-0.3							
6	0.3	-0.1	0.2	-0.1	0.5						
7	-0.1	0.2	0.0	0.1	0.3	0.2					
8	0.4	-0.3	0.4	-0.4	0.5	0.4	0.2				
9	0.4	-0.3	0.3	-0.3	0.4	0.3	0.1	0.5			
10	0.2	0.0	0.2	-0.2	0.4	0.3	0.3	0.4	0.2		
11	-0.1	0.1	0.1	0.1	0.3	0.2	0.3	0.3	0.2	0.4	
12	0.1	-0.1	0.0	0.0	0.1	0.3	0.0	0.0	0.2	0.0	0.1

上記の頻度群の検定で有意差の出た1~4、8~10がそれぞれ互いに中程度以上の相関を示している。他に、カラオケをコミュニケーションの場とする5が6、8、9、10と、メンバーとの一体感を評価する8が1、3、4、5、6、9、10と、それぞれ中程度の相関を示しており、5と8がカラオケをめぐり心意のメインストリームをなすものであることを示唆している。また、頻度群による差異のなかった11と12には相関もなく、この2つの欲求が相反するものではなく、一人のカラオケ利用者の中で両立しているものであることを示している。

4. 整理と考察

以上の結果を踏まえて（中西・玉木2015-1）（中西・玉木2015-2）での聞き取り調査から抽出したカラオケにおける選曲の心理について整理・検討していこう。

まず参加メンバーによる差異の問題だが、気の置けない仲間や家族などのストレスの低いメンバーによるカラオケでも、序盤ではみんなで一緒に盛り上がるような曲を入れ、逆にしっとりとしたバラードは歌わないように気をつけるといった一座のカラオケの大づかみな構成感への配慮が行われていることがわかった。しかし、なんらかの意味で気を遣う必要のあるメンバーがいるようなカラオケにおいてはこれらの配慮が濃厚に行われるばかりでなく、さらに、みんなが知っていそうな曲、好きそうなジャンルを歌い、他のメンバーが歌っている楽曲の流れを壊さないような調和的な配慮も積極的に行われていることがわかった。

前稿（中西・玉木2015-1）では、同一アーティスト楽曲が続けばある程度それに追従するものの、「よい頃合い」で終了させて共通点を持った別アーティストにずらすことによって場の空気を維持しつつ、心地よく変化させるといった「流れ」への配慮の存在を指摘した。そしてそれがカラオケを「一座する芸能」として成立させる重要な要素であることにも言及した。今回の調査を踏まえれば、こういった前後の選曲の流れを

考慮して選曲することは局所的な現象ではなく、ある程度一般性を持ったものであるとすることができるだろう。

しかし、同様に指摘したいいわゆる「ネタ曲」の投入に関しては、必ずしも肯定的選択者が多くはなかった。これらのことから「ネタ曲」の投入は、大多数ではなく一部のメンバーが担う行為であることが推定できる。

前稿（中西・玉木2015-1）で指摘し本稿冒頭でも言及した「自分の好きな曲を気持ちよく歌いたい」という自己目的的な歌唱欲求と「良好な雰囲気を作りたい」という関係性志向的な調和欲求については、今回の調査（3-8の分析）によって、この二つの欲求の片方ずつを偏って持つ群が存在するわけではなく、二つの欲求の両方が大方のカラオケユーザの中に併存していることが明らかになった。

さらに、特にカラオケに行く頻度の高い群においてカラオケをコミュニケーションの場とし、参加者との一体感を味わいたいとする心意が支配的であり、頻度の低い群においてもその認識はある程度共有されていることがわかった。このことは、カラオケが彼ら世代にとって単なるエンターテインメントではなく、仲間コミュニティの形成や人間関係の構築に資する行為として意識されているということを示唆していると言えるだろう。そして「カラオケはコミュニケーションの場だ」「カラオケでは一緒に行った人たちとの一体感を感じられる瞬間が嬉しい」というセンテンスに肯定的な人たちが、同時に「カラオケから人との付き合い方を学ぶことがある」を肯定する傾向があったことにも注目したい。（中西・玉木2015-2）では「行事の打ち上げ」としてのカラオケをかつての「若者組」と対比させて論じたが、若者にとっての社会教育の場としての意味合いも、若者自らがある程度自覚するところであることが見て取れるのである。

5. おわりに

以上論じてきたように、前稿（中西・玉木2015-1）（中西・玉木2015-2）において指摘した若者のカラオケの特性、特に選曲の心理については、今回のアンケート調査によって定量的にもおおむね裏付けられたと言えるだろう。今後は質問紙内容をさらに精選し、より広い範囲で調査するとともに、実際にカラオケで歌われた楽曲の記録の分析、海外でのカラオケ利用の実態との比較などを通して、カラオケという現代文化の特性を明らかにしていきたい。

〔注〕

- 1 ネタ曲：「笑いが起こるような曲」「みんなで盛り上がるような曲」のこと。場の空気が停滞したときなどに選曲されることがある。
- 2 デンモク：カラオケ関連企業第一興商が販売する電子選曲システムの登録商標だが、タッチパネルを備えたカラオケの選曲用リモコン一般を呼ぶ語としても使われている。

〔出典〕（出現順）

- 中西・玉木2015-1：中西裕, 玉木博章. 聞き取り調査に見る若者のカラオケにおける選曲の心理—「一座する芸能」としてのポピュラー音楽消費行動. 就実表現文化. 2015, 第9号, p.75-94.
- 全国カラオケ事業者協会2015：全国カラオケ事業者協会. カラオケ白書 2015. 全国カラオケ事業者協会, 2015, p.153-155.
- 中西・玉木2015-2：中西裕, 玉木博章. 行事によって形成される関係性をもたらす行動と心理的变化に関する試論—祭りの後の祭り「打ち上げ」の聞き取り調査を手がかりにして. 就実論叢. 2015, 第44号, p.249-262.
- 辻2013：辻泉. グローカル化するカラオケ・コミュニケーション. 近森孝明・工藤保則編. 無印都市の社会学 どこにでもある日常空間をフィールドワークする. 2013, 法律文化社, p.146-147.

